

# 事後アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

## Significance of Short-term Study Abroad Program and Future Issues from Post-Questionnaire Surveys

松浦 康之<sup>1,2</sup> 長谷川 旭<sup>1,3</sup> 藤田 怜史<sup>3</sup>

MATSUURA Yasuyuki<sup>1,2</sup> HASEGAWA Akira<sup>1,3</sup> FUJITA Satoshi<sup>3</sup>

<sup>1</sup>データ駆動科学教育研究センター <sup>2</sup>健康栄養学科 <sup>3</sup>国際コミュニケーション学科

### Abstract

This article examines the significance and future considerations of a short-term study abroad program based on the analysis of questionnaire surveys conducted one and three months after the program. Analyses of the surveys reveals a decline in students' motivation to study English over time, and a gradual waning of their interests for a trip or a study abroad. Regarding college lectures, over 90% of respondents expressed a heightened interest in "U.S. society, history, and cultures" compared to their pre-program levels. Finally, this article reviews what the short-term study abroad program should be to develop "Global human resources." The study highlights the importance of continually enhancing learning effectiveness by integrating this program with other curricula or by offering preparatory and follow-up instruction courses.

**Keywords:** 海外研修、国際交流、短期研修、異文化交流、学習意欲、語学教育

### 1. はじめに

2020年～2023年にかけて、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）の爆発的な蔓延により、社会において大きな変化を必要とする事態となった。教育現場においても、オンラインによる講義への転換などを余儀なくされた。その中で、国際交流関係の事業はより大きな影響を受けることとなった。岐阜市立女子短期大学においても、交換留学や海外短期研修の中止を余儀なくされた。その中で、オンラインによる国際交流など新たな試みも行われてきた（今・松浦・小森 2021a、今・松浦・小森 2021b）。2023年、日本においては、新型コロナウイルス感染症は、2類感染症から5類感染症に移行された。また、各国の水際対策が大きく緩和されるなど、COVID-19以前の日常に近づきつつある。

2022年9月に、英語英文学科と国際文化学科の合同で、「海外英語演習（英語英文学科、2単位）」および「海外言語・文化演習（英語圏）（国際文化学科、1単位）」（以下、両演習を合わせて、「アメリカ研修」とする）を約2週間（2022年9月1日～9月15日）、アメリカ合衆国・カリフォルニア州において実施した。アメリカ研修の利点と課題を今後に生かすために、同研修前後にアンケート調査を実施した（松浦・鈴木・長谷川・藤田 2022）。

本論文はアメリカ研修の実施内容と、同研修一か月後と三か月後に行ったアンケート結果をもとに、大学生の異文化理解や国際交流および語学学習における学習意欲に関する考察を行い、今後の課題と展望を提示する。

### 2. アメリカ研修

アメリカ研修は、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校での講義や演習、ホームステイでの生活などを通じて、英語力を強化すること異文化の理解や学習意欲を向上させること、文化や社会に関する知識を身につけることを目的としている（松浦・鈴木・長谷川・藤田 2022）。

参加人数は24名で、英語英文学科は10名（1年生：7名、2年生：3名）、国際文化学科は14名（1年生：6名、2年生：8名）であった。

アメリカ研修一か月後／三か月後アンケートでは、外国語学習に関するモチベーションの変化、今後の海外への渡航計画などを質問した。

### 3. アンケート結果

#### 3-1. 参加学生の概要

アメリカ研修一か月後アンケートについては24名、同研修三か月後アンケートについては22名からの回答を得られた。

#### 3-2. アメリカ研修一か月後／三か月後の変化

アメリカ研修一か月後／三か月後アンケートの回答結果は、以下の通りであった。

##### 3-2-1. 英語学習への学習意欲

英語学習の学習意欲の変化について尋ねた結果を図1に示す。なお、アメリカ研修直後の学習意欲の変化について

ても、参考として記載した(松浦・鈴木・長谷川・藤田 2022)。

アメリカ研修直後は、英語学習への意欲は「増えた」または「やや増えた」という回答しかなかった。しかし、学習意欲が減ったという回答こそないものの、一カ月後には1名が「やや減った」と回答し、三カ月後には5名が「やや減った」と回答するなど、徐々に学習意欲は低下していた。

現在の英語学習への学習意欲は、アメリカ研修直後と比べてどう変化しましたか？

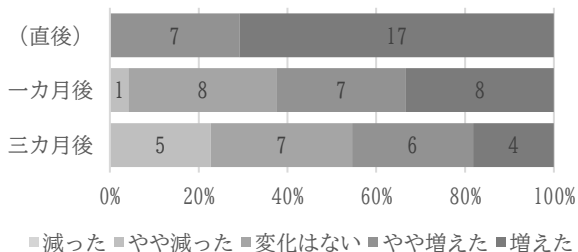


図 1. 英語学習への学習意欲の変化

### 3-2-2. 英語能力の変化

アメリカ研修後、現在の英語能力の変化について尋ねた結果を図 2 に示す。

現在の英語能力は、アメリカ研修直後と比べてどう変化したと思いますか？

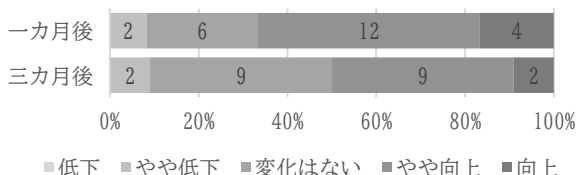


図 2. 英語力の変化

「やや低下」と回答した数は 2 人いたものの、「低下」という回答はなかった。図 1 に示されたように、時間の経過とともに学習意欲の低下傾向はあるとしても、全体的な傾向として、アメリカ研修が参加者の英語能力の向上の自覚につながっている。

### 3-2-3. 英語学習時間の変化

アメリカ研修前と比較して、現在の英語の学習時間の変化について尋ねた結果を図 3 に示す。

図 3 で、学習時間が「やや減った」と答えたのは 1 人で、「減った」という回答は 0 である。アメリカ研修への参加によって、英語の学習意欲が刺激されたこともまた明らかである。

アメリカ研修前と比べて、現在の英語の学習時間に変化はありましたか？

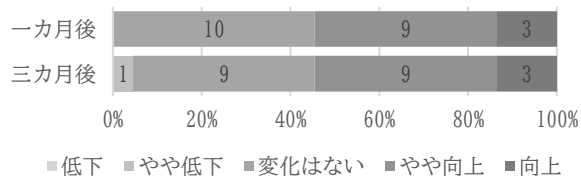


図 3. 英語学習時間の変化

### 3-2-4. アメリカ研修で知り合った人との連絡

ホストファミリーやアメリカで知り合った人(日本人を除く)との連絡頻度について尋ねた結果を図 4 に示す。一カ月後、三カ月後ともに「よく連絡している(週に 6~7 日)」とした学生はいなかった。

最近(直近の1か月)、ホストファミリーやアメリカで知り合った人(日本人を除く)と連絡は取っていますか？

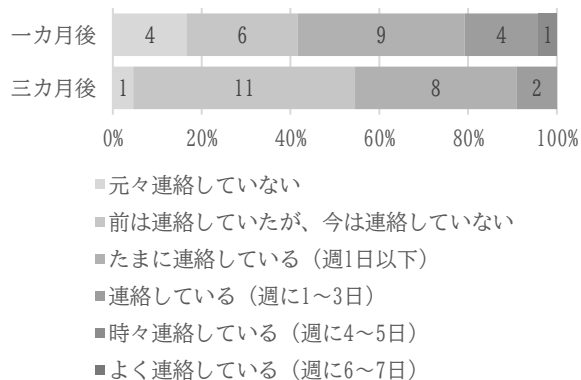


図 4. アメリカ研修で知り合った人との連絡

### 3-2-5. 英語学習方法の変化

アメリカ研修前と比較して、以前よりも英語学習方法として増えた項目を複数回答可として尋ねた結果を図 5 に示す。

なお、図中の記号は次のような対応となっている。

- イ) 英語のドラマや映画などを視聴
- ロ) YouTube など動画サイトで英語の動画を視聴
- ハ) 外国人(芸能人など)の SNS (Instagram、Twitter など) をフォロー、購読
- ニ) 英語のニュースサイトを見る
- ホ) 英語の本を読む
- ヘ) 英語のアニメ・マンガ等を見たり読んだり
- ト) その他

エンターテイメント要素が強く、受動的な項目である、

事後アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

イ) やロ)、ハ) については一カ月後よりも三カ月後の方が増えている。これはアンケート調査を行ったことよって気づきがあり、学習方法として採用した可能性がある。一方で、能動的に取り組まなければならない、ニ) やホ) については、一カ月後よりも三カ月後時点でやめてしまっており、継続に至れていない。この点は、学習意欲の低下傾向との関係が示唆される。

アメリカ研修後、以前よりも増えた項目にチェックを付けてください（複数回答可）

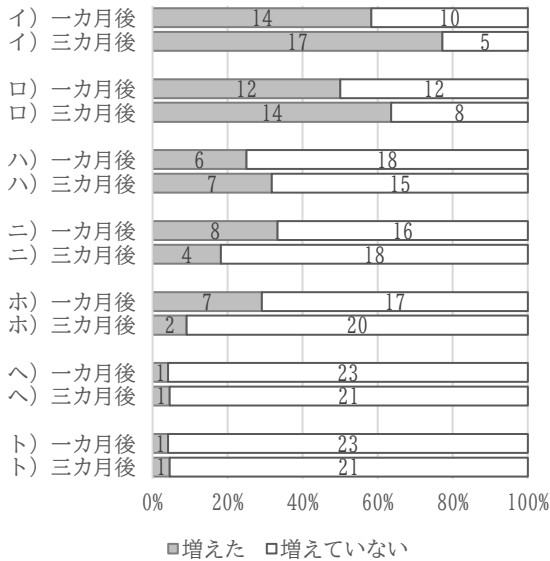


図5. 英語学習方法の変化（複数回答可）

3-2-6. 海外旅行・留学の具体的な計画

海外旅行の具体的な計画の変化について尋ねた結果を図6に、アメリカ研修前と比較した留学（短期留学、交換留学等）の具体的な計画の変化について尋ねた結果を図7に示す。

図6と図7で、「予定（決意）が固まっている」と回答した数が時間経過とともに減り、「まったく考えていない」の数が増えている。特に留学に関しては増加率が高い。現実的な問題（就職活動や費用の面）なども要因としては考えられるが、前述した学習意欲の低下と関係している可能性も示唆される。

3-2-7. 留学（短期留学、交換留学等）への意欲の変化

アメリカ研修前と比較した留学（短期留学、交換留学等）への意欲の変化を尋ねた結果を図8に示す。

一カ月後、三カ月後ともに、「弱く」、「やや弱く」なったという回答はなかった。一方、一カ月後よりも三カ月後の方が、「強く」なったという回答が増えており、時間経過とともに、現地学習の必要性を感じている様子が推察さ

れる。また、図6や図7と照らし合わせると、具体的な海外旅行や留学計画を確定させるまでには至っていない。

現時点で、海外旅行の具体的な計画を立てていますか？

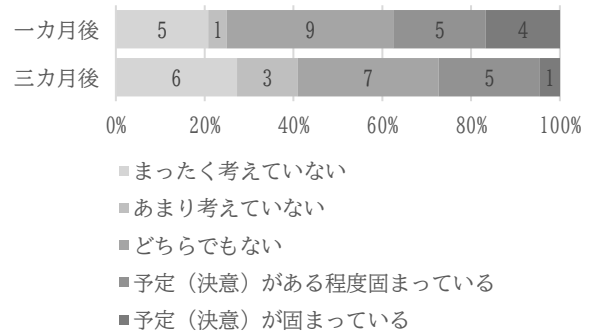


図6. 海外旅行の具体的な計画の有無

現時点で、語学留学（短期留学、交換留学等）の具体的な計画を立てていますか？

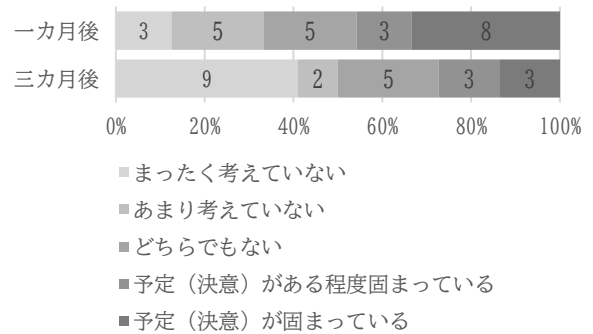


図7. 留学の具体的な計画の有無

アメリカ研修前と比べて、留学（短期留学、交換留学等）への意欲に変化はありましたか？

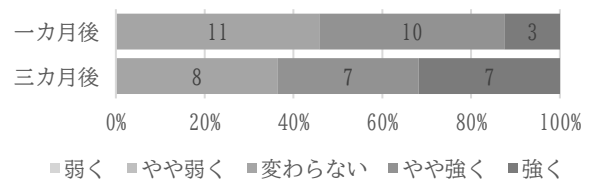


図8. 留学への意欲の変化

3-3. アメリカ研修一カ月後アンケートの結果

アメリカ研修一カ月後のみで質問したアンケート結果は、以下の通りであった。

3-3-1. 英語講義の履修希望

アメリカ研修参加による英語講義の履修希望について、複数回答可として尋ねた結果を図9に示す。

アメリカ研修において実際にコミュニケーションを中心に英語を活用したことで、リスニングやスピーキングに対する授業の需要が高まったと考えられる。

アメリカ研修に参加したことで、どのような英語の講義を履修したいと思うようになりましたか？  
(複数回答可)

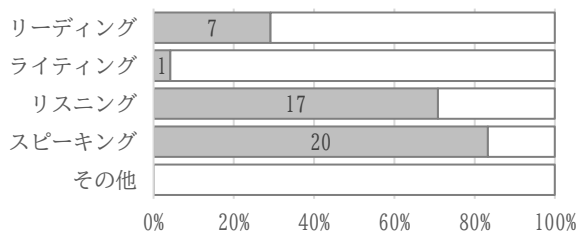


図 9. 英語講義の履修希望

### 3-3-2. 履修希望の変化

アメリカ研修参加による履修希望の変化について、複数回答可として尋ねた結果を図 10 に示す。

- アメリカの社会・文化・歴史系
- ヨーロッパの社会・文化・歴史系
- アジアの社会・文化・歴史系
- ヨーロッパ圏の言語（英語以外）
- アジア圏の言語
- その他

アメリカ研修に参加したことで、どのような講義を履修したいと思うようになりましたか？  
(複数回答可)

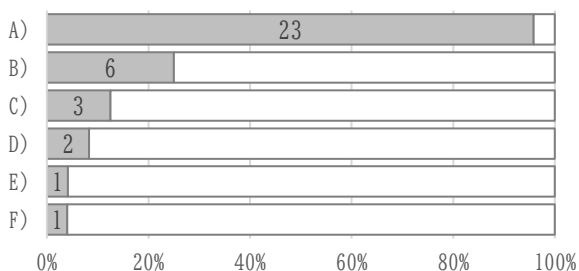


図 10. 講義の履修希望

ほとんどの学生が「A) アメリカの社会・歴史・文化系」の講義を履修したいと回答し、またアメリカのルーツとなるヨーロッパに対する関心もやや高めている。これらに関連する 1 年後期以降の講義としては、英語英文学科では「現代アメリカ事情」、「英語圏の社会・文化」および「イギリス文化論」などが、国際文化学科では「英米文化論」、「ヨーロッパ文化論」などが用意されている。

学科再編によって、令和 5 年度より英語英文学科と国際

文化学科を再編した国際コミュニケーション学科が開設された。国際コミュニケーション学科において、上記に直接関連する科目（1 年後期以降）としては、「英語圏文化・社会」、「英語表象文化」、「英米文学」などがある。学生にとってこれらの科目群で興味関心や学習にとって十分であるか否かについては現時点では不明であるが、中国語圏・韓国研修を含め、海外短期研修と連動させたカリキュラムを構築することにより、参加者の学修へのモチベーションを維持することが可能となる。

### 3-3-3. 履修科目選択の変化

アメリカ研修参加による後期履修科目の選択の変化について尋ねた結果を図 11 に示す。

「とても変化した」と回答した学生はいなかった。これは、2 年生の参加者が約半数であったことと、英語英文学科および国際文化学科での履修において、選択の余地が少なかったことが原因であると考えられる。

また、図 10 の結果を考慮すると、アメリカ研修先の社会・歴史・文化に対する関心が高まる傾向があると考えられる。したがって、今後の海外短期研修では、研修への参加によって履修科目選択の変化が起きる可能性はある。

アメリカ研修に参加したことで、後期履修科目の選択に変化はありましたか？

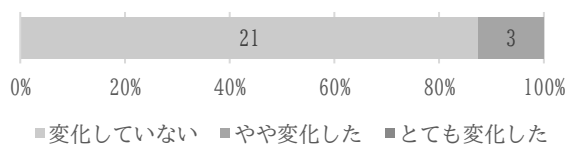


図 11. 履修科目選択の変化

### 3-3-4. 今後の進路選択等への影響

アメリカ研修参加による今後の進路選択等への影響について尋ねた結果を図 12 に示す。

今回のアメリカ研修に参加したことは、今後の進路の選択等にどう影響すると思いますか？

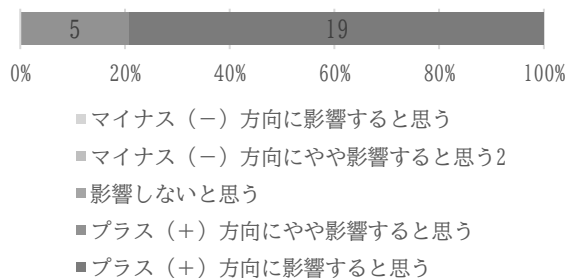


図 12. 今後の進路等への影響

## 事後アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題

「マイナス(-)に影響」、「マイナス(-)にやや影響」、「影響しないと思う」という回答はなく、約 8 割が「プラス (+) に影響する」と回答しており、今後の進路選択にプラス (+) 方向に大きな影響があることが確認された。

## 3-3-5. アメリカ以外の訪問希望国・地域

研修先であったアメリカ以外の訪問希望国・地域について尋ねた結果（複数回答可）を表 1 に示す。

表 1. アメリカ以外の訪問希望国・地域（複数回答可）

国名	人数
イギリス	18
カナダ	17
フランス	14
北欧（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド）	13
オーストラリア	13
韓国	12
ニュージーランド	11
シンガポール	11
イタリア	10
ドイツ	8
スペイン	8
中国	8
ヨーロッパ（その他の非英語圏）	7
マルタ	6
アイルランド	5
ヨーロッパ（イギリス、アイルランド、マルタ以外の英語圏）	4
フィリピン	4
マレーシア	3
オセアニア（オーストラリア、ニュージーランド以外）	2
アフリカ	2
アジア（その他）	1
中近東	1
中南米	1
北極	1
南極	1
特になし	0

主に英語圏やヨーロッパ圏に対する関心が高いことが本結果から分かる。また、韓国や中国に対する人気も高い。

## 3-4. アメリカ研修三カ月後アンケートの結果

アメリカ研修三カ月後のみで質問したアンケート結果は、以下の通りであった。

## 3-4-1. 本学における英語 4 技能のカリキュラムについて

本学の英語 4 技能のカリキュラムについて尋ねた結果を図 13 に示す。「その他・分からない」の回答はいずれの項目でも 0 名だった。なお、スピーキングについてはシステム不具合で 1 名分が欠損値となっている。

本学のカリキュラムは、英語（リスニング/スピーキング/リーディング/ライティング）力を向上させるのに十分なものだと思いますか？

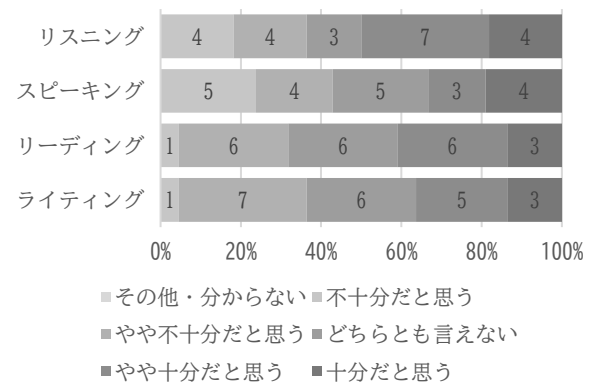


図 13. 英語 4 技能のカリキュラムに対する意見

## 3-4-2. 英語 4 技能についてのカリキュラムに関する考察

図 9 にあるように、アメリカ研修に参加した学生の大半がリスニングやスピーキング関連の講義に対する履修意欲を高めている。それに対して、リスニング力向上に関する本学カリキュラムへの評価として、肯定的評価が 11、否定的評価が 8 であり、スピーキング力向上に関しては、肯定的評価が 7、否定的評価が 9 となった。

上記評価と自由記述の内容を検討すると、ネイティブ教員による講義の重要性が浮かび上がる。最初に、否定的評価について考察する。英語英文学科所属で、アメリカ研修参加により英語学習意欲が「やや増えた」（三カ月後）と答えた学生は、リスニング、スピーキング向上の双方にとって本学カリキュラムは「不十分」で、その理由については「文法ばかりだから」と回答している。同じく英語英文学科所属で学習意欲が「増えた」（三カ月後）と答えた学生も、本学カリキュラムはリスニング、スピーキング力向上にとって「やや不十分」と回答した。理由について、「もう少し実用性のある講義をしてほしい」と記述している。国際文化学科所属の学生については、そもそも「英語の講義が少ない」ため、その点においてカリキュラムが不十分と回答した学生が 2 名いた。

次に、肯定的評価について考察する。英語英文学科所属で、リスニング、スピーキング力向上に関して本学カリキュラムを「やや十分」と評価した学生は、ネイティブ教員と話しながらリスニングができることを評価している。ネイティブ教員による英会話講義に対する肯定的評価はそれ以外にもあった。

以上の結果から、本学の英語カリキュラムに肯定的であれ否定的であれ、共通しているのはネイティブ教員による実践的な英語の講義が、アメリカ研修に参加した学生たちにとってきわめて重要であることがわかる。アメリカ研修参加から時間が経つにつれて英語学習へのモチベーションが下がる傾向があることを考慮すると、学生らのモチベーション維持のために、より細やかな実践的英語講義の提供を検討する必要がある。

## 4. 今後の展開

### 4-1. 人材育成

グローバル人材やグローバルから想起される人材の定義は、各企業や大学において異なるが、グローバル人材グローバル人材育成推進会議において、要素Ⅰ～Ⅲを満たす人材をグローバル人材として定義している(グローバル人材育成推進会議 2011)。要素Ⅰは語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱは主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲは異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ、である。

また、データサイエンスや人工知能(AI)が注目されたり、生成 AI の国際的なルール作りが行われるなど、科学分野においても国際的な視点も必要である(松浦・高田・平田 2015、松浦・鈴木・長谷川・藤田 2022)。

これらの視点から、本学データ駆動科学教育研究センターが中心となって 2024 年度から、全学科の学生が受講できるグローバルデータサイエンスコース(GDSC)を開設する予定である。GDSC は、データサイエンス系とグローバル系の科目に分かれており、データサイエンス系には地域活性化人材育成事業～SPARC～によるデータ分析演習の科目も含まれ、グローバル系には海外短期研修も含まれている。この GDSC の海外短期研修では、海外で実際勤務中の方の話を聞いたり、異文化理解やキャリアパスについて学習できる機会を設ける予定である。また、事前研修や事後研修に当たる講義も設定している。事前研修に当たる講義では海外短期研修での各自のテーマ設定を、海外短期研修では前述の要素Ⅰ～Ⅲに関する自己評価各自のテーマに関する資料収集・発見に関する記録を行うことや各自のテーマに関する発表を、事後研修に当たる講義では海外短期研修の振り返りなどを行う。これらによって、グロー

バル人材の育成に資する海外短期研修になる。なお、事前研修・事後研修に当たる講義は、さくらサイエンスプログラムなども活用しながら、海外短期研修に参加しない学生にとっても有用な内容にする予定である。そして、GDSC の講義の中では、課題解決型学習(PBL, Project Based Learning)などを用いながら、論理的思考や国際的な視点を醸成する講義も備える。科学技術の発展と国際社会における変化について、自分なりの新たな視点による問題の発見や社会の在り方について多面的な視野を身に付けていく。

### 4-2. 海外短期研修

本アンケート調査の結果、アメリカ研修に対する期待度・満足度および学習効果は概ね高いことがわかった。

2024 年度以降の海外短期研修を見ると、国際コミュニケーション学科では 3 研修(英語圏(夏季休業)、中国語圏(夏季休業)、韓国(夏季休業))、デザイン環境学科では 1 研修(欧州(春季休業))、データ駆動科学教育研究センターでは 1 研修(タイ(春季休業)、全学科対象)の計 5 研修が行われる予定である。データ駆動科学教育研究センターによる海外短期研修が開始されることによって、これまで行われていなかった東南アジア方面の海外短期研修が開始されることと、これまで海外短期研修がなかった健康栄養学科所属の学生も海外短期研修の参加が可能となり、研修先の拡充のみならず、全ての学生が海外短期研修に参加可能な環境が整うこととなる。これは、筆者らの論文で議論した研修先の拡大や学習の選択肢の幅を広げることの意味する(松浦・鈴木・長谷川・藤田 2022)。

また、筆者らの論文は事前/事後研修の重要性も述べた(松浦・鈴木・長谷川・藤田 2022)。これを踏まえ、GDSC では事前/事後研修になる講義をカリキュラムに組み込んでいる。学習効果を踏まえると、事前/事後研修に当たる講義は重要である。一方で、春季休業に行われる海外短期研修では、2 年生は海外短期研修への参加と卒業が同時期となるため、事後研修に当たる講義を受講できない。そのため、資料配布等の振り返りの機会を与える必要がある。また、国際コミュニケーション学科においても、「英語圏文化・社会」など既存の講義を活用する、ないし独自の事前/事後研修の実施により、参加者の学習効果向上を模索していく必要もある。

さらに、生成 AI の登場など、時代の変化は早く大きいため、社会情勢の変化や前年度の各研修内容、学生の興味関心などに合わせて、カリキュラムや各研修の内容を常に見直して、より学習効果が得られる形にしていくことが肝要である。

**参考文献**

グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成推進  
会議中間まとめ」(2011)

今悠恭、小森雄太、松浦康之「オンライン交流による外国語および外国文化の学習意欲向上に関する基礎的研究—岐阜市立女子短期大学とプリンス・オブ・ソクラー大学による取り組みを事例にして—」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』70 (2021a) : 1-7

今悠恭、小森雄太、松浦康之「オンライン国際交流による異文化交流と学習意欲向上の取り組み」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』71 (2021b): 15-20

松浦康之、高田宗樹、平田隆幸「国際的視点に立った福井県における高大連携数理教育の検討と実践」『福井大学大学院工学研究科研究報告』63 (2015): 55-61

松浦康之、鈴木辰一、長谷川旭、藤田怜史「アンケート調査から見た海外短期研修の意義と今後の課題」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』72 (2022): 7-13

(提出日 令和5年9月29日)